

長法寺旧蔵「釈迦金棺出現図」（京都国立博物館）は、金剛峯寺蔵「涅槃図」とともに院政期仏画の名品として知られる。涅槃に入った釈迦が、忉利天より降下した生母摩耶のために棺蓋を開けて半身を現じ、遺教をなすという、その特異な主題については、これまで主として典拠とすべき経典に関して考究されてきた。はやくから指摘されたのは蕭齊曇景訳『摩訶摩耶経』であったが、これとは別に、近年の研究によって敦煌写本中のいわゆる『仏母経』、あるいは梁僧祐撰述の『釈迦譜』の示す内容が図相の諸点においてより適合することが明らかにされ、その結果中国敦煌莫高窟の唐宋期の涅槃変相や、わが国の平安末から鎌倉期における金棺出現を含む涅槃変相の遺例の多くが、とりわけ『釈迦譜』の所説に影響を受けたとする提説は、それ自体大方の首肯を得ている。

ただ、釈迦の金棺出現という主題において、おそらくもっとも重視すべき無余涅槃に入った釈迦が、あらためてその姿を器世界に出現させるという奇跡については、その思想上の淵源がなお詳らかでなく、典拠となる経典は『摩訶摩耶経』以前には見出せず、遺物も西周時代（690～705）の莫高窟第332窟壁画や、山西の涅槃変相像を遡る例は知られない。加えてその『摩訶摩耶経』も、梁僧祐『出三蔵記集』では失訳としたものが、隋の法経等『衆経目錄（法経録）』で沙門曇景訳、費長房撰『歴代三蔵記』以降の経録では、斉あるいは南斉沙門釈曇景と記すなど、曇景訳とするには不確実で、内容の上からも疑点が多く、一般に偽経とみなされている。

しかるに姚秦竺仏念訳『菩薩處胎経』に『摩訶摩耶経』の金棺出現を想起させる記述があるのが知られ、とくに注目される。後秦(384～417)は5世紀初葉に西進して涼州一帯を制圧し、これに伴い涼州沙門竺仏念も後秦に帰属することとなったが、『菩薩處胎経』が語る臨終の釈迦が示すいくつかの奇跡も、そこに西域と中国を結ぶ要路上に位置したことで、絶えず西方やインドと接触を保った涼州仏教による解釈が加味された可能性を否定し得ない。この場合、ネストリウス派（景教）の中国への伝播は公式には唐太宗の頃というものの、6世紀初めには北魏の洛陽に伝わっていた証左があり、宣教師の布教によって「キリスト復活」の奇跡も、当然仏教や道教などの宗教者をはじめとして、民間にある程度知られるに至ったことを考慮すべきである。なお関連して、『摩訶摩耶経』が経題を借用する西晋竺法護訳『仏昇忉利天為母説法経』において、如来は智慧波羅蜜から生じ、三十二大人相も十力も決して王后摩耶の所生に非ざることを強調するのが留意され、それは聖母マリアはイエスの肉体を育てただけで、イエスに神性を与えるものではない、とするネストリウス派の重要な教義に符合することも、この際知るべきである。

[キーワード] 釈迦金棺出現、 『摩訶摩耶経』、 ネストリウス派（景教）、 キリスト復活